

出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書

第13集

上塙治横穴墓群第8支群

2003年2月

出雲市教育委員会

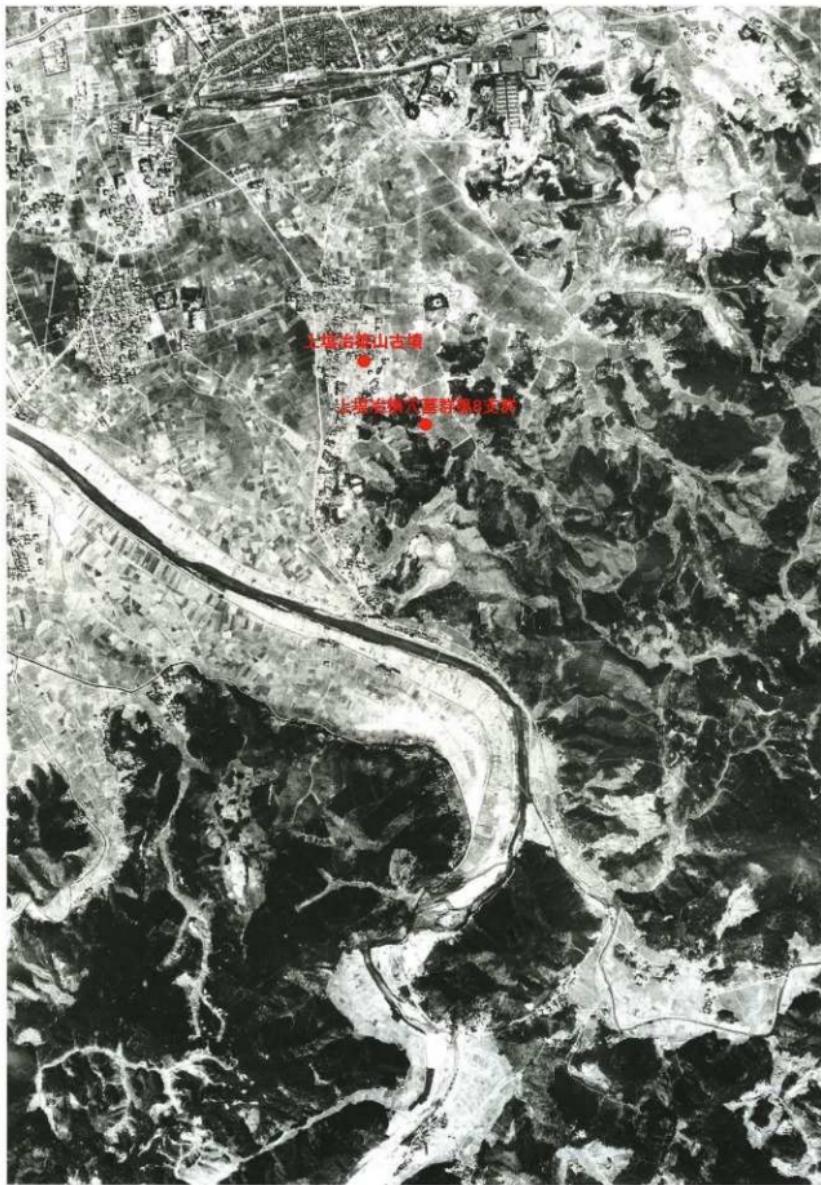
出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書

第13集

上塩冶横穴墓群第8支群

2003年2月

出雲市教育委員会



米軍空撮写真（上塙治横穴墓群周辺）

序

出雲市上塩冶町に位置する上塩冶横穴墓群は、全国最大規模の横穴墓群として知られています。本書はこのうち第8支群について、その調査結果をまとめたものです。

上塩冶横穴墓群第8支群は上塩冶横穴墓群の中でも古い横穴墓群と考えられ、当時の墓制や築造技術を考えるための新たな資料を提供することができました。

本書が多少なりとも地域の埋蔵文化財に対する住民の皆様の理解、学習の助けとなれば幸いに存じます。

なお、発掘調査をするにあたり、一畑工業株式会社並びに関係各方面からご支援、ご協力をいただきましたことに対し、心から厚くお礼申し上げます。

平成15年2月

出雲市教育委員会

教育長 多 久 博

例　　言

1. 本書は、平成13年（2001）年度に出雲市教育委員会が、一畑工業株式会社 取締役社長 高野保の委託を受け実施した職員駐車場造成及び工事土砂採取に伴う「上塩治横穴墓群第8支群」の調査報告である。
2. 発掘調査は下記の期間において実施した。
平成13年（2001）5月31日～8月3日
3. 発掘調査地は次の通りである。
上塩治横穴墓群第8支群　出雲市上塩治町1553番地ほか
4. 調査組織は次の通りである。
調査主体　出雲市教育委員会

○平成13年度【2001】

調査指導　池淵俊一（鳥根県教育委員会文化財課埋蔵文化財係文化財保護主事）
事務局　川上　稔（芸術文化振興課文化財室長）
調査員　遠藤正樹（文化財室副主任主事）
調査補助員　佐々木紀明、伊藤晶子（文化財室臨時職員）
室内整理作業員　遠藤恭子

○平成14年度【2002】（報告書作成）

事務局　川上　稔（芸術文化振興課文化財室長）
調査員　遠藤正樹（文化財室副主任主事）
調査補助員　佐々木紀明、伊藤晶子（文化財室臨時職員）
室内整理作業員　荒木恵理子、岩崎晶美

5. 発掘調査には、次の方々に従事していただいた。
　　公山悦朗、周藤俊也、前島正喜、米山清司
6. 発掘調査、並びに報告書作成にあたっては、調査指導者のほかに以下の方々から有益なご助言とご協力を賜った。記して謝意を示しておきたい。（敬称略）
　　井上貴央、椋田崇生（鳥取大学医学部）、西尾克己（鳥根県埋蔵文化財センター主幹）
　　角田徳幸、間野大丞、林　健亮（同文化財保護主事）、澤田正明（同臨時職員）
7. 本書で使用した挿図の方針は磁北を示し、国土地標は日本測地系に基づく。
8. 遺物の実測は、遠藤正樹、佐々木紀明、伊藤晶子のほか、伊藤めぐみ（文化財室臨時職員）が行った。
9. 本書掲載の鉄製品の実測図は、全て保存処理前の形状を図化したものである。
10. 本書の執筆、編集は遠藤が行った。
11. 出土人骨については、井上貴央、椋田崇生氏より玉稿を賜った。
12. 本書掲載の遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している

目 次

序文

例言

目次

挿図目次

上塩治横穴墓群第8支群の調査	1
第1章 調査にいたる経緯	1
第2章 位置と環境	1
第3章 調査の概要	5
第4章 小結	16
出土遺物観察表1	17
出土遺物観察表2	18
附編	19
上塩治横穴墓群第8支群出土人骨について	19
井上貴央、椋田崇生（鳥取大学医学部）	
図版	図版1～11
抄録	

挿図目次

第1図	上塩治横穴墓群支群分布図	2
第2図	上塩治横穴墓群第8支群測量図	3
第3図	1号穴土層図	5
第4図	1号穴実測図	5
第5図	1号穴人骨出土状況	6
第6図	1号穴出土遺物	7
第7図	2号穴土層図	7
第8図	2号穴遺物出土状況 1	7
第9図	2号穴遺物出土状況 2	8
第10図	2号穴加工痕検出状況	8
第11図	2号穴出土遺物 1	9
第12図	2号穴出土遺物 2	10
第13図	2号穴出土遺物 3	10
第14図	3号穴実測図	11
第15図	3号穴加工痕検出状況	11
第16図	3号穴出土遺物 1	12
第17図	3号穴出土遺物 2	12
第18図	3号穴出土遺物 3	13
第19図	5号穴実測図	14
第20図	5号穴加工痕検出状況	14
第21図	5号穴出土遺物	14
第22図	6号穴加工痕検出状況	15
第23図	7号穴実測図	15
第24図	7号穴加工痕検出状況	15

上塩治横穴墓群第8支群

第1章 調査に至る経緯

事業者である一畑工業株式会社（松江市中原町51 取締役社長 高野 保）は、出雲市上塩治町に所在する一畑バス出雲営業所地内に職員駐車場造成及び工事土砂採取を計画され、平成13年5月15日付文書にて、埋蔵文化財確認調査の依頼が出来た。予定地は周知の遺跡である上塩治横穴墓群第8支群の範囲内であり、現状でも横穴墓が2穴確認できることから、調査箇所を限定することを目的に、平成13年4月26、27日に試掘調査を実施した。その結果、新たに2穴の横穴墓が確認されたため、その旨を事業者に回答した。既に本調査を実施する必要があることは明白であったため、事業者は平成13年3月30日付文書にて、文化財保護法第54条の2の規定による埋蔵文化財発掘の届出を文化庁長官に提出しており、市教育委員会は平成13年5月31日から発掘調査に着手した。発掘調査着手後、平成13年6月5日に文化財保護法第58条の2の規定による埋蔵文化財発掘の報告を島根県教育委員会教育長に提出している。

第2章 位置と環境

南北の山系に挟まれた出雲平野は島根県の東部、宍道湖の西側に位置する沖積平野で、斐伊川と神戸川の沖積作用により形成された山陰有数の穀倉地帯である。その中で上塩治横穴墓群第8支群の所在する塩治地区は、平野南端から丘陵部にあり遺跡の密集地帯として知られている。

縄文時代の出雲平野は、縄文海進によりその大部分が海面下であったと考えられるが、塩治地区からは平野縁辺部から土器や丸木舟などの多量の遺物が出土した三田谷I遺跡が確認されている。

弥生時代になると、中期に出雲平野の遺跡が爆発的に増えるが、塩治地区では旧自然堤防上に天神遺跡のような大規模集落が占有するようになる。後期になると、これらの大規模集落を背景としてか、三田谷I遺跡では西日本の検出例が少ない方形周溝墓も造墓された。

古墳時代になると、斐伊川水系の集落が安定して営まれると対象的に、神戸川水系にあたる塩治地区からは集落が消えて行く。三田谷I遺跡からは古墳時代中期の集落跡が検出されているが、当時の集落遺跡は調査例が少ないと貴重な資料となっている。

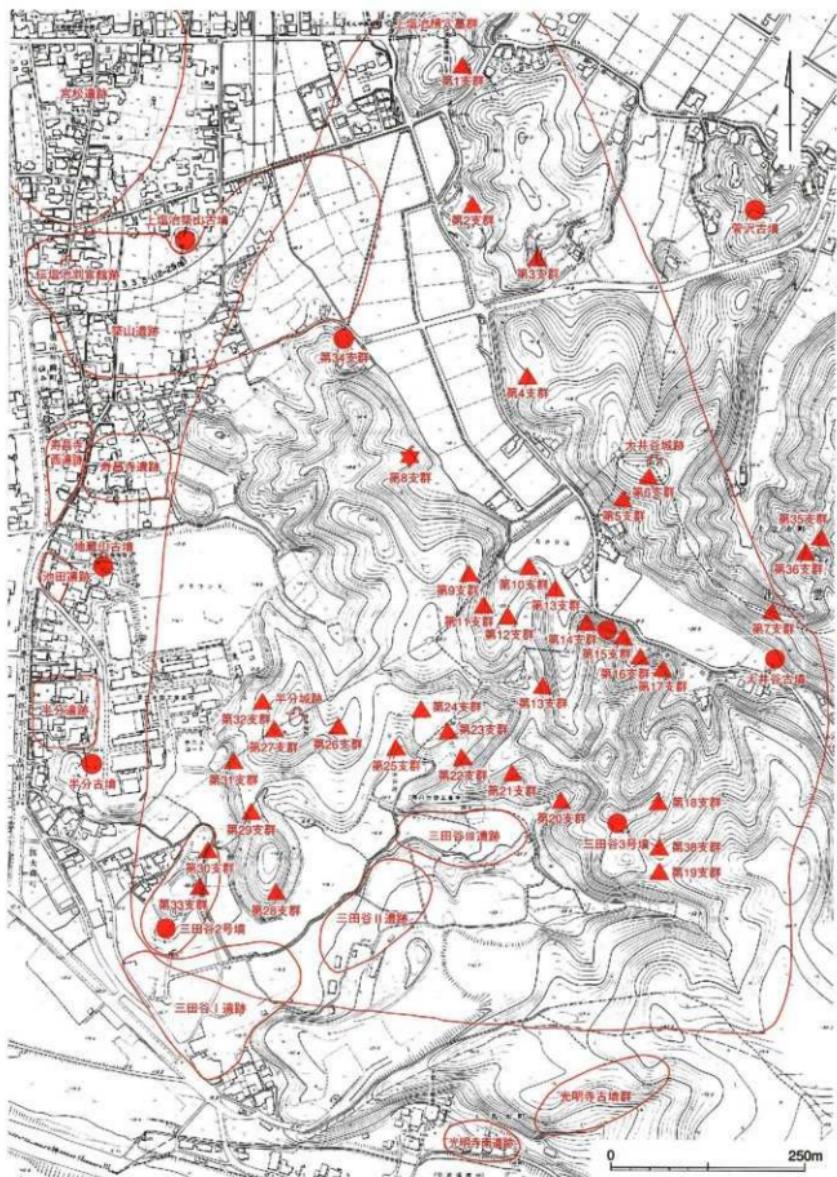
古墳時代後期になると、古墳の数が爆発的に増え、塩治地区でも半分古墳や今市大念寺古墳の首長系譜を継承していると考えられている上塩治築山古墳など多くの古墳が造墓される。やがて上塩治横穴墓群が丘陵北端の軟質な岩盤に造られ始めるが、終末期になると谷奥の凝灰岩にも造られるようになり、全国最大規模と呼ばれる横穴墓群を形成するに至った。同じ頃、上塩治築山古墳の首長系譜を継承する上塩治山古墳が造墓され、塩治地区的丘陵は墓域の性格を持つようになる。

歴史時代になると、塩治地区からは光明寺3号墓・普陀古墓の石櫃の例に見られるように古代の火葬墓が確認されている。県内で確認された火葬墓の多くが塩治地区及びその周辺で確認されており、塩治地区的特殊性が窺われる。

これらの基盤となったであろう天神遺跡からは、掘立柱建物跡が多数確認されている。

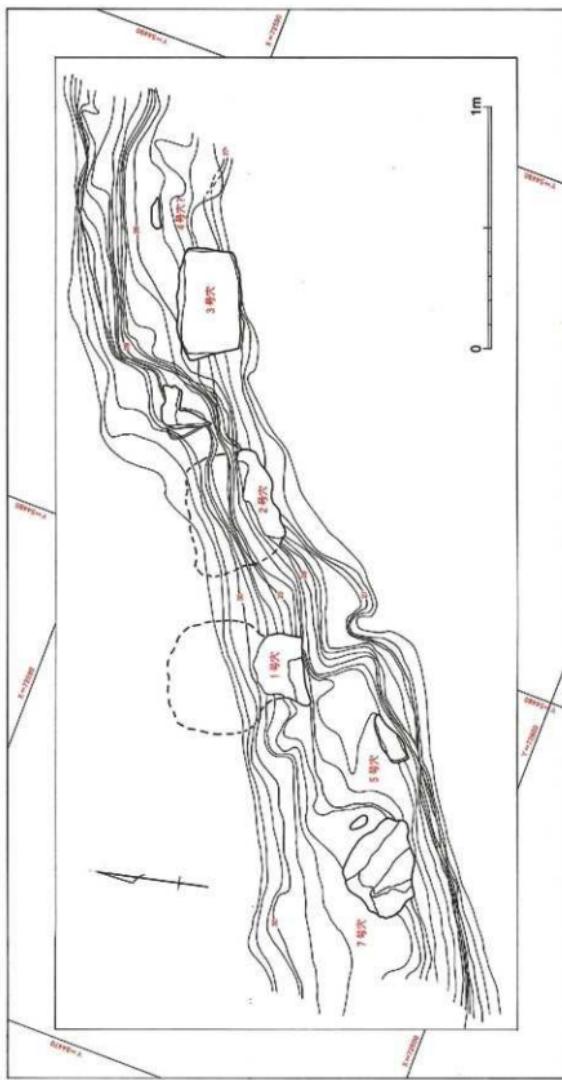
中世になると、丘陵谷奥の大井谷II遺跡に中世寺院が造営されている。大井谷II遺跡では豊富な中世陶磁器のほか、多量の土器が出土しており、塩治氏や朝山氏との関連が指摘されている。

また交通、軍事上の要衝地であったためか、塩治地区には大井谷城、半分城、向山城など多くの山城が築城されている。



第1図 上塙古墳群支群分布図

第2図 上池古墳穴道群第8支洞剖面図



上塙治横穴墓群一覽表

部	編號	主 体 部	形 態	岩 築	副 附 品	調 査 原	文 献	備 考
1	1		家型喪入				文献1	
2	2				須恵器、耳環		文献1	消滅
3	10		家型喪入・アーチ		須恵器		文献1	半壊
4	2			凝灰岩	須恵器、耳環		文献1	半壊
5	2			凝灰岩			文献1	
6	5	屍床	家型喪入	凝灰岩	須恵器、土師器、鉄鏺、鐵釘、直刀	美多窯55	文献1	
7	4		家型喪入・ドーム	凝灰岩	須恵器、銅製品	県教委94,96	文献1,5,6,11	消滅
8	7	屍床	アーチほか	凝灰岩など	須恵器、耳環、大刀、刀子、象嵌鏡	市教委91	文献1	消滅
9	1		家型喪入	凝灰岩			文献1	
10	5		平天井	凝灰岩			文献1	
11	2			凝灰岩			文献1	
12	11		アーチ	凝灰質砂岩	須恵器	県教委96	文献1,6,11	消滅
13	4		アーチ	凝灰岩			文献1	
14	10		家型喪入・アーチ・平天井	凝灰岩など	須恵器、土師器、耳環、刀子、玉類	県教委92	文献1,2	消滅
15	4		家型喪入・アーチ	凝灰岩など	須恵器、銅製品	県教委92	文献1,2	消滅
16	3		家型喪入	凝灰岩	須恵器	県教委93	文献1,2	消滅
17	14	屍床	家型喪入・家型平入	凝灰岩	須恵器、耳環、鐵鏺、直刀、銅製品	県教委78,市教委96	文献1,9	消滅
18	2		家型喪入・平天井?	凝灰岩	須恵器、小玉	市教委97	文献1,9	消滅
19	4		家型喪入・アーチ	凝灰岩	須恵器、土師器、銅製品	市教委97	文献1,9	消滅
20	5	屍床	家型喪入・家型平入	凝灰岩	須恵器、大刀	県教委92	文献1,3	消滅
21	10	屍床	家型喪入・アーチ・ドーム	凝灰岩	須恵器、鐵鏺、鐵釘、直刀、金糸、石製品	県教委92	文献1,3	消滅
22	21	石床・屍床	家型喪入	凝灰岩など	須恵器、土師器、金銀装大刀、馬具、金環、玉類、鐵鏺、鐵釘、刀子、武釘	県教委79,95	文献1,5,8,11	消滅
23	7	屍床	家型喪入・アーチ	凝灰岩など	須恵器、玉類	県教委95	文献1,5,11	消滅
24	1		家型喪入	凝灰岩			文献1	
25	2	個體に到达	家型喪入	凝灰岩			文献1	
26	1		家型喪入	凝灰岩			文献1	
27	4		家型・アーチ	凝灰岩	須恵器、金環	市教委79	文献1,4	消滅
28	2		家型喪入	凝灰岩など	須恵器、鐵釘		文献1,6,10	消滅
29	2		家庭喪入	凝灰岩			文献1	
30	0					市教委90	文献1	消滅
31	2	家型石棺	家型喪入				文献1	
32	12	家型石棺	家型喪入・アーチ	凝灰質砂岩		県教委62,96	文献1	
33	8	石棺	家型喪入・アーチ		須恵器、大刀、耳環、玉類、金銀装大刀	市教委90,県教委96	文献6,11	消滅
34	6	難床・棺台?	アーチ	凝灰質砂岩(?)	須恵器、土師器、鐵環、刀子	市教委92,93,96	文献12	消滅
35	1		家型喪入	砂岩	須恵器、土師器、耳環、鐵製銅鏡、ガラス	県教委94	文献5,11	消滅
36	3		家型平入・ドーム	砂岩など	須恵器、大刀、馬具、黃金具	県教委94	文献5,11	消滅
37	1		アーチ	砂岩	鐵釘、鐵鍊	県教委96	文献11	消滅
38	3		家型喪入	凝灰岩	須恵器、丹青十輪器	市教委97	文献9	消滅
	184							

文献

- 鶴都明・西尾茂之編『上塙治横穴墓を中心とする滋賀文化財研究会報告』滋賀省出光工事事務所・鳥根県教育委員会 1980年
- 鳥谷芳義編『伊川野水路跡付定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』大井谷石切場跡・上塙治横穴墓群第14支群・上塙治横穴墓群第16支群・建設省出光工事事務所・鳥根県教育委員会 1997年
- 鶴都明編『上塙治横穴墓群第20・21支群・伊川野水路跡付定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』滋賀県出光工事事務所・鳥根県教育委員会 1995年
- 内閣府文化庁『平成元年度文化政策研究会報告書』滋賀県教育委員会 1979年
- 鳥根県教育委員会『滋賀県教育行政文化政策研究会報告書』滋賀県教育委員会 1995年
- 鳥根県教育委員会『滋賀県教育行政文化財保護文化政策セミナー報告』 1996年
- 鳥根県教育委員会『鳥根県教育行政文化財保護文化政策セミナー報告』 1997年
- 鳥根県教育委員会『鳥根県教育行政文化財保護文化政策セミナー報告』 1998年
- 鳥根県教育委員会『鳥根県教育行政文化財保護文化政策セミナー報告』 1999年
- 波瀬利江子著『愛知川放水道付近に記載された須恵器調査報告書』上塙治横穴墓群第17・18・19・38支群・大井谷石切場・石切場跡1・2・三田谷3号墳』滋賀県中田地方地政課出光工事事務所・出光市教育委員会 2000年
- 久保田一郎編『愛知川放水道付近に記載された須恵器調査報告書』上塙治横穴墓群第28支群』建設省出光工事事務所・鳥根県教育委員会 1999年
- 守山正司編『伊川野水路跡付定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』上塙治横穴墓群第14支群・縣谷古墳・大井谷石切場・上塙治横穴墓群(第7・12・22・23・33・35・36・37支群)』建設省出光工事事務所・鳥根県教育委員会 1998年
- 松山洋以小林『上塙治横穴墓群第16支群発掘調査報告書』出光市教育委員会 1998年

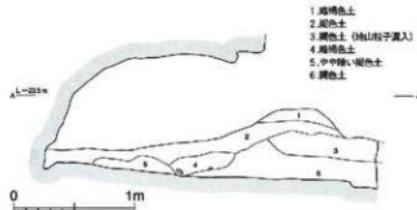
第3章 調査の概要

出雲平野南部丘陵に所在する上塩治横穴墓群は、大井谷を中心として全国最大規模の横穴墓群を形成している。この大横穴墓群の中には1~21穴のまとまりを持った支群があり、2003年2月末現在、38支群184穴の横穴墓群が確認されている（第1図）。

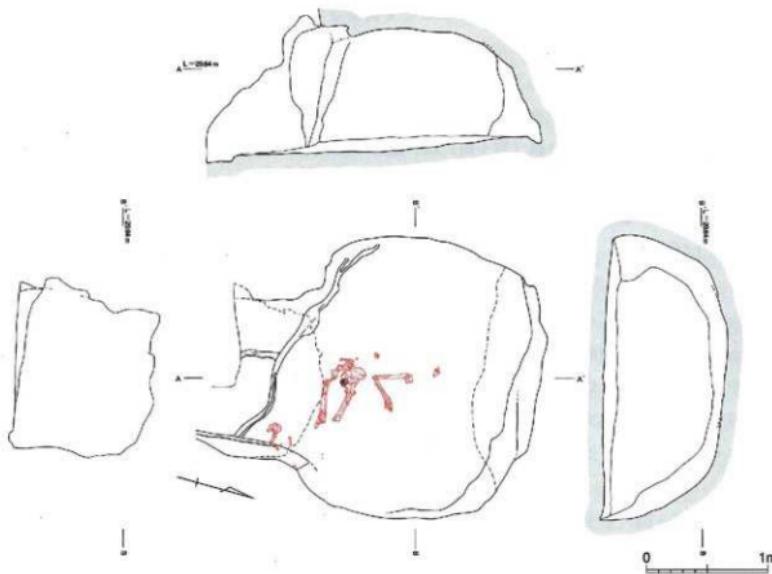
このうち第8支群は、大井谷から枝状に派生する谷に所在し、発掘調査では南向き斜面から7穴の横穴墓を確認している（第2図）。

1号穴（第4図）は調査前より開口していた横穴墓で、玄室前庭部は欠損し、天井部も崩落しているため、天井形態は不明である。平面プランは玄室長2.06m、玄室幅2.33mのいびつな方形状を呈し、東壁沿いと西壁袖付近から排水溝が残る。開口方向はS~16°~Eである。床面は丁寧に加工されているが、羨道及び前庭部には加工痕が明瞭に残る。羨道には方形状の縁り込みが残り、閉塞に関する縁り込みと考えられる。

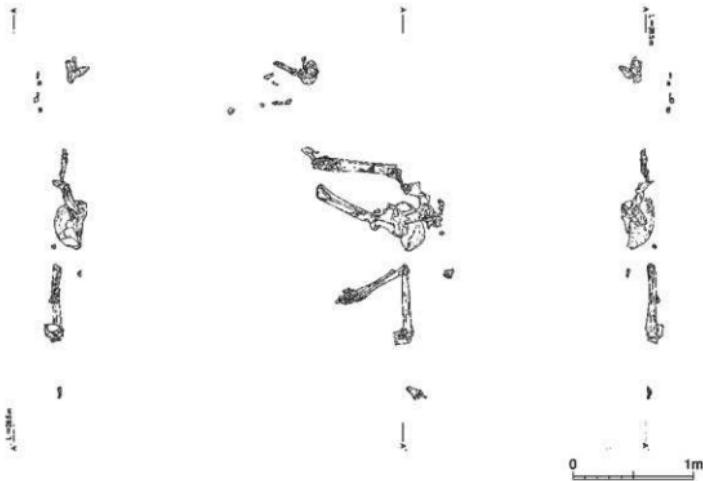
遺物は古墳時代の須恵器壺片及び人骨が出土している。壺片は3号穴出土壺片との接合関係が確認されており、1号穴は3号穴と同時期に造墓された可能性がある。一方、人骨は保存状況は良好であったが、肋骨を含む胸部は欠損し、頭蓋骨は下半身の下から出土している。また腕部は関節部が交連状態であるにもかかわらず、



第3図 1号穴土層図



第4図 1号穴実測図

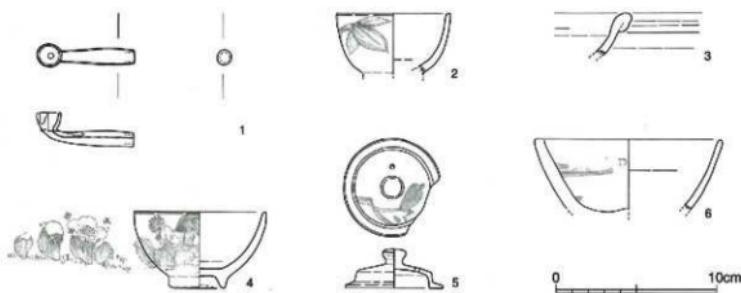


第5図 1号穴人骨出土状況

肩部から解体されたように外れていた（第5図）。鳥取大学医学部の井上貴央氏によれば、横穴墓内の
人骨が、動物などの進入などにより搅乱される例はあるが、この場合については、人為的な行為による
殺戮・遺棄の可能性を考える必要があることを指摘されている。この人骨が殺戮・遺棄された遺体とすると、横穴墓の被葬者であるかということが問題になるが、人骨下の小ピットから近世陶器（肥前系京焼風陶器？）の破片が出土していることから、人骨は近世以降のもので、横穴墓の被葬者ではないと考えられる。また玄室内埋土（第3図）第1～2層に包含する遺物（第6図）の時期から、人骨検出位置に堆積する有機物層（第4層）は、遺体の腐食物を含んでいる可能性がある。

第6図は1号穴出土遺物である。1は銅製の煙管で、雁首が出土している。吹口から見て左側に接合痕が残り、ラウ接合部にラウの一部が残存していた。火皿は内湾しながら立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げている。また油返しの湾曲は少なく直線的で、補強帯、肩ともに見られない。古泉弘氏の編年¹¹のIV～V段階のものと考えられる。2は陶器壺で、口縁部は外方に内湾気味に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げる。外面には葉が彩色され、全面に貫入が残る。3は陶器鉢で、口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部を外側に折り込み肥厚させ、外面に1条の沈線を施す。4は磁器碗で、口縁部はやや外方に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げる。外面に鶴、花などを型紙摺りする。5は陶器の蓋で、つまみを施す。全体的に角ばった作りで、口縁端部は露胎にしているが、その他は施釉されており貫入が入る。外面には木に留まつた鳥が描かれている。6は肥前系染付碗で、口縁部は外方に直線的に伸び、端部は尖り気味に仕上げる。外面には染付が施されている。

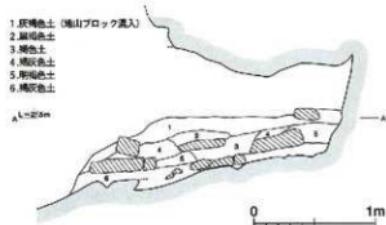
2号穴（第8図）も玄室前庭部が欠損し、天井部も崩落しているため、天井形態は不明である。平面プランは玄室長1.99m、玄室幅2.37mでいびつな方形状を呈している。開口方向はS～50°～Eである。床面には20～30cmの平坦な石を敷き詰め、埋葬施設を作り上げている（第9図）。埋葬施設下の



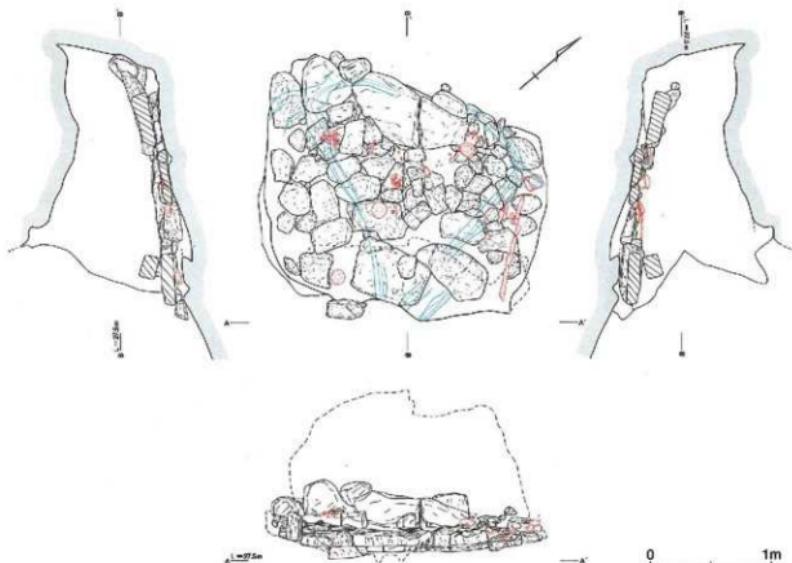
第6図 1号穴出土遺物

床面には奥壁沿いに排水溝を設け、両端から玄門中央に直線的に排水溝を設けている（第8、9図）。また床面には多数の工具痕が残り、壁側は幅広の道具で粗く加工し、中央は小型の道具で加工している。壁面の加工痕は天井崩落のため下部にしか残らないが、床面に近い部分は幅広の道具で粗く加工されていた（第10図）。

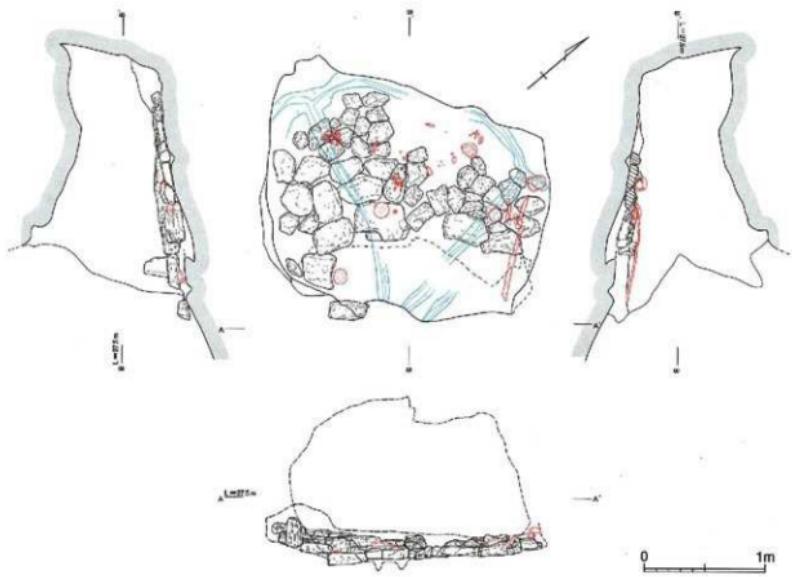
玄室内埋土（第7図）は、第1～5層が天井崩



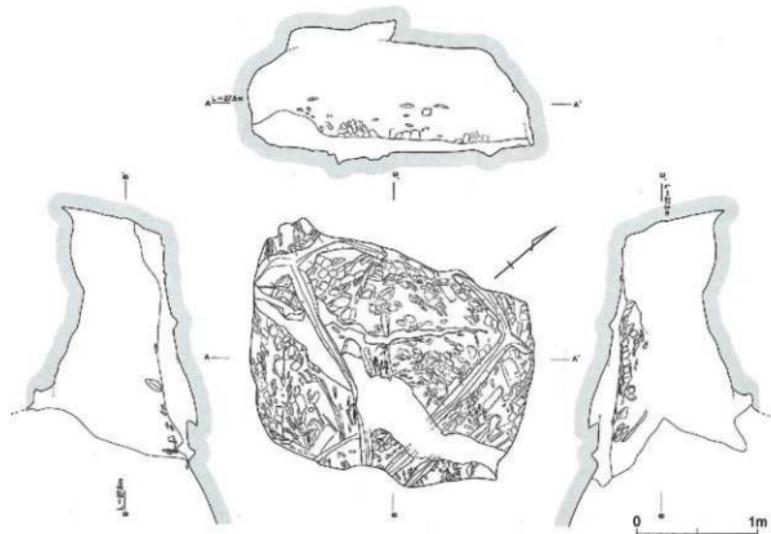
第7図 2号穴土層図



第8図 2号穴遺物出土状況1



第9図 2号穴遺物出土状況2

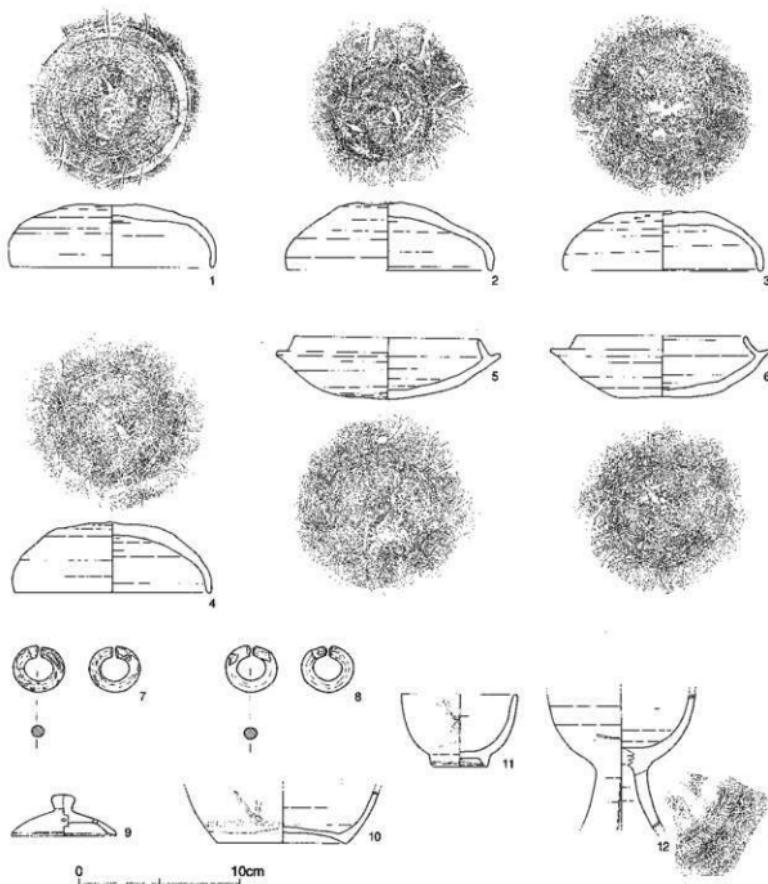


第10図 2号穴加工痕検出状況

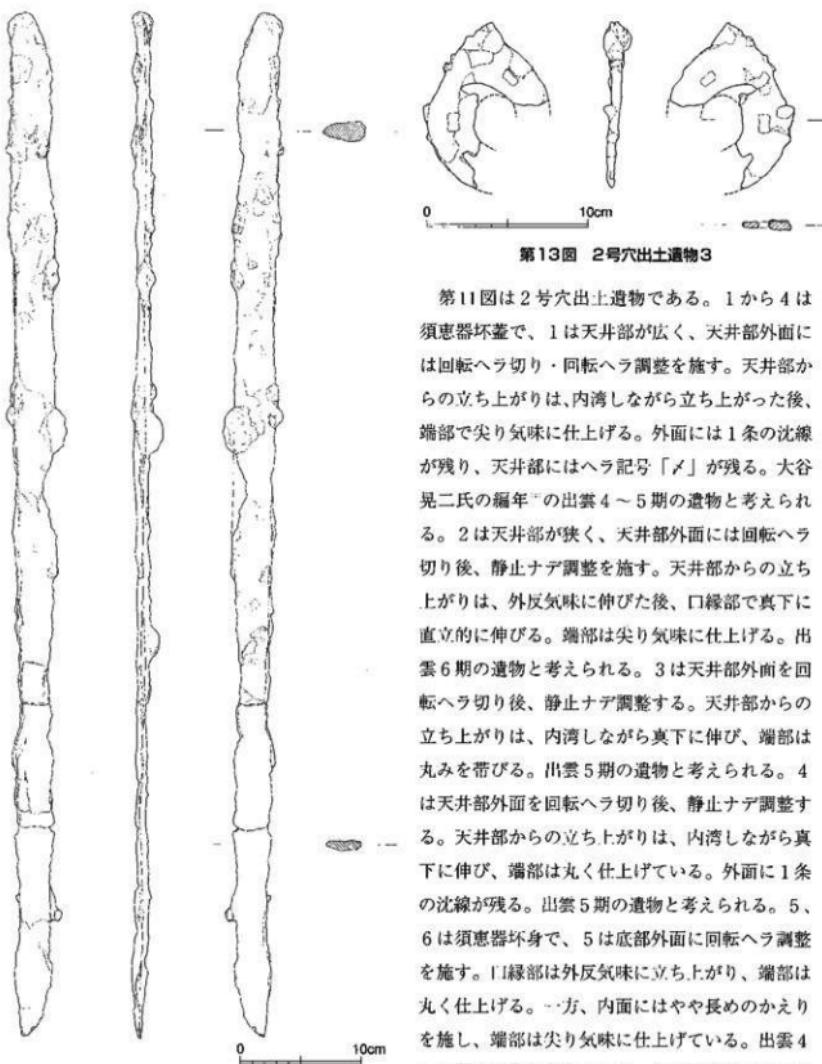
落後の堆積土で、第6層が天井崩落前の堆積土である。第6層上面には落盤した天井のほか、玄室前面に閉塞石が残る。

遺物は大刀、須恵器蓋坏、耳環など豊富であるが、天井から剥離落盤した岩の上から蓋坏の完形品を確認している（第8、9図）、天井崩落後、遺物が人為的に移動していると考えられる。

なお2号穴からも人骨が出土している。人骨の保存状況は1号穴と比較して格段に悪く、歯牙、骨片などが交連状態なく出土している（第8、9図）。一部の須恵器と同じく、この人骨は天井から剥離落盤した岩の上などから出土しており（第8図）、後世に行われた盗掘または動物進入の折に大幅に搅乱を受けたか、1号穴出土人骨のような場合も考えられよう。



第11図 2号穴出土遺物1

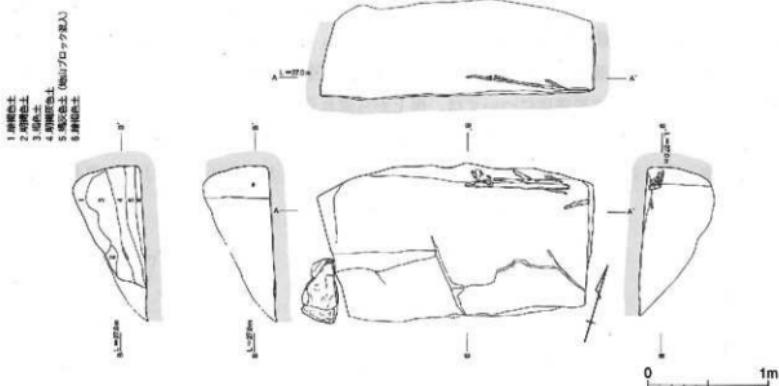


第12図 2号穴出土遺物2

第13図 2号穴出土遺物3

第11図は2号穴出土遺物である。1から4は須恵器坏蓋で、1は天井部が広く、天井部外面には回転ヘラ切り・回転ヘラ調整を施す。天井部からの立ち上がりは、内湾しながら立ち上がった後、端部で尖り気味に仕上げる。外面には1条の沈線が残り、天井部にはヘラ記号「メ」が残る。大谷晃二氏の編年¹⁰の出雲4～5期の遺物と考えられる。2は天井部が狭く、天井部外面には回転ヘラ切り後、静止ナデ調整を施す。天井部からの立ち上がりは、外反気味に伸びた後、口縁部で真下に直立的に伸びる。端部は尖り気味に仕上げる。出雲6期の遺物と考えられる。3は天井部外面を回転ヘラ切り後、静止ナデ調整する。天井部からの立ち上がりは、内湾しながら真下に伸び、端部は丸みを帯びる。出雲5期の遺物と考えられる。4は天井部外面を回転ヘラ切り後、静止ナデ調整する。天井部からの立ち上がりは、内湾しながら真下に伸び、端部は丸く仕上げている。外面に1条の沈線が残る。出雲5期の遺物と考えられる。5、6は須恵器坏身で、5は底部外面に回転ヘラ調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げる。一方、内面にはやや長めのかえりを施し、端部は尖り気味に仕上げている。出雲4～5期の遺物と考えられる。6は底部外面に回転ヘラ切りの後、回転ヘラ調整を施す。口縁部は外

反気味に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げている。一方、内面にはやや長めのかえりを施し、端部は尖り気味に仕上げている。出雲4～5期の遺物と考えられる。7、8は耳環で銅芯に金メッキを施し、対になる遺物と考えられる。9、10、11は玄室の表採遺物である。9は磁器蓋で、ツマミ、空気孔を施



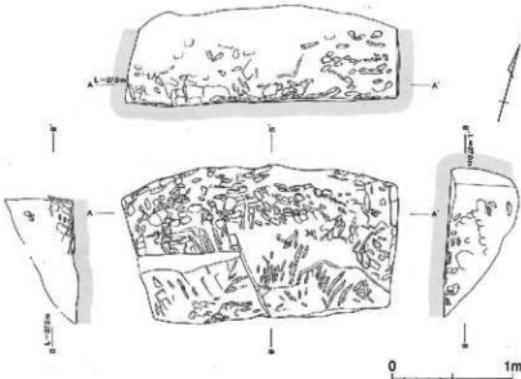
第14図 3号穴実測図

す。内外面ともに施釉するが、口縁部付近に露胎を作っている。10は染付壺の底部で外面に染付を施す。内外面ともに施釉するが、釉調にムラがあり、底部付近には露胎を作っている。11は陶器小塊で、口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部は丸く仕上げる。外面に文様を施し、内外面ともに施釉し貫入があるが、高台豊付では露胎を作る。12は須恵器で、器壁は脚部から内湾しながら立ち上がり、脚部接合部付近には列点文が施される。一方、脚部は据に向かって外反気味に伸び、透かしを施している。

第12図1は2号穴出土の鉄刀である。刀は総長84.7cmの大刀で、付近からは鉄製鐔も出土している。刀工による日本刀の製作では、軟鉄を硬鉄の峰側から巻き込んで鍛造するため、断面が3層構造になるが、出土した鉄刀は現状で刃面が3層に剥離しており、同じような製作方法が考えられる。

第13図1は第12図1の鉄刀と対になる鉄製板鐔である。一部欠損するが、倒卵形を呈するものと考えられる。表面には方形形状の透かしが残り、間隔から六窓鐔と考えられる。6世紀末頃の鐔と考えられる。

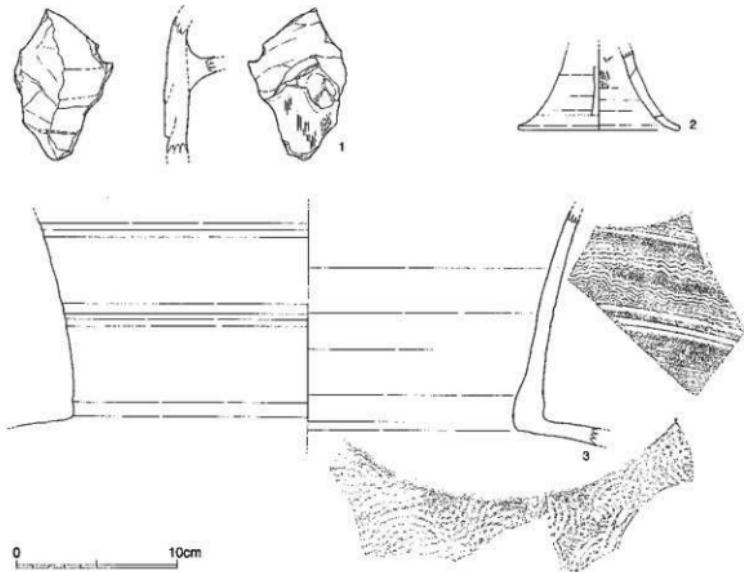
3号穴（第14図）は、後世の石切や岩盤の崩落により、玄室前方部と天井部を欠損するが、奥壁・側壁の界線は明確である。平面プランは玄室長1.31m以上、玄室幅2.27mで、造墓時は正方形状と推定されることから、家型の横穴墓である可能性がある。遺物は奥壁付近で鉄刀（大刀）2本、刀子3本、象嵌銅片2点が出土している。床面（第15図）は工具痕が粗く残り、奥壁・側壁付近には大型の工具痕が、



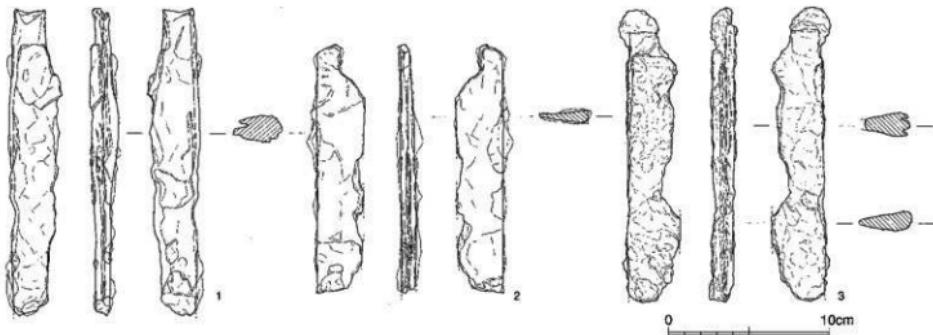
第15図 3号穴加工痕検出状況

中央部には小型の工具根が残ることから、工具を使い分けて造墓していることがわかるが、加工面上層に遺物の全く出土しない層（第14図第6層）が広がっており、置土をして整地している可能性もある。

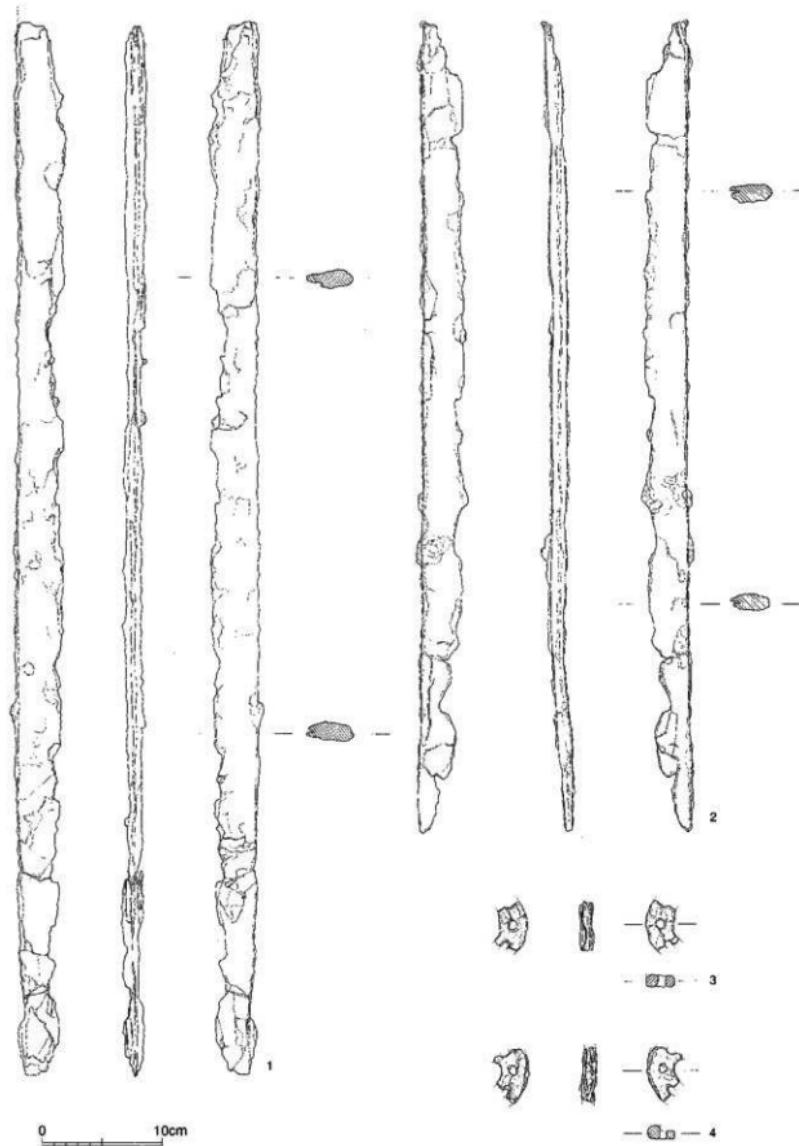
出土遺物は、玄室前方部と天井部が欠損しているため、玄室内堆積土（第14図）第3、4層の界面中央付近から出土した須恵器壺片については、崖上から流れ込んだ可能性も否定できないが、1号穴出土須恵器壺片と接合関係にある壺片が出土している。一方、鉄刀・刀子・象嵌銛については、玄室内堆積土（第14図）第5層のオーバーハングした奥壁沿いから出土しており、崖上から流れ込んだ可



第16図 3号穴出土遺物1



第17図 3号穴出土遺物2



第18図 3号穴出土遺物3

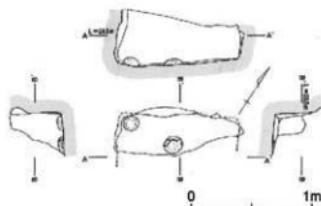
能性が考えにくいくことから、3号穴被葬者の副葬品と考えられる。

第16図1から3は3号穴出土須恵器で、玄室内堆積土（第14図）第5層から出土した。1は須恵器で、外広がりの部品が付く。焼きが悪く残存部が少ないので不明な点が多いが、形状から子持壺の可能性も考えられる。第8支群北西約400mの上塩治築山古墳周辺からは同古墳に関連すると考えられている子持壺が出土しており、第16図1の須恵器片と同じ層から出土している象嵌鏡の時期を6世紀後半頃とすると、上塩治築山古墳などとの関連も考える必要があろう。なお、平成14年度に実施された築山遺跡の調査で、上塩治築山古墳南東約200mの位置（第8支群北西約200m）から円筒埴輪片を確認している。2は脚部で、裾部は外反しながら伸び、端部には平坦面を作る。方形状の透かしが作られている。3は壺の頸部から肩部で、口縁部の立ち上がりは外反気味に伸びる。頸部外面には波状文、沈線が描かれる。

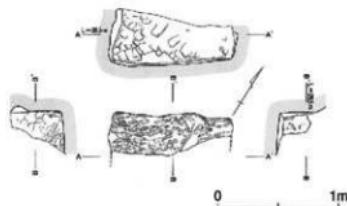
第17図1から3は3号穴第5層（第14図）出土の刀子で、ともに刃先が欠損し、刃面に剥離が見られる。剥離は鍛造したことによるものと考えられる。

第18図1、2も3号穴第5層（第14図）出土の鉄刀で、それぞれ残存長86.7cm、総長66.5cmの大刀である。刃面に剥離が見られ、剥離は鍛造したことによるものと考えられる。

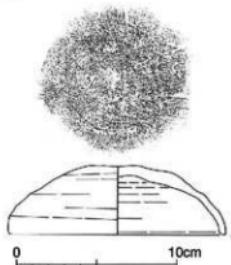
3、4は鉄刀象嵌鏡である。3は倒卵形の板状で、表面に方形状の透かしを施し、鏡側面に象嵌を施す有窓耳象嵌鏡である。欠損部分が多いため詳細は不明であるが、透かしの間隔から八窓程度の鏡になると考えられる。4も倒卵形の板状で、有窓耳象嵌鏡である。透かしの間隔から八窓程度の鏡になるとと考えられる。これらは現在保存修理中であるが、同一個体であるとの中間報告を受けている。6世紀後半頃の鏡と考えられる。



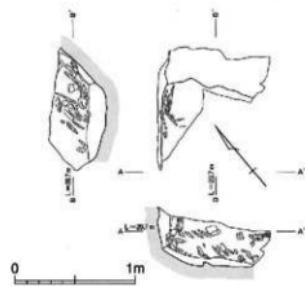
第19図 5号穴実測図



第20図 5号穴加工痕検出状況



第21図 5号穴出土遺物



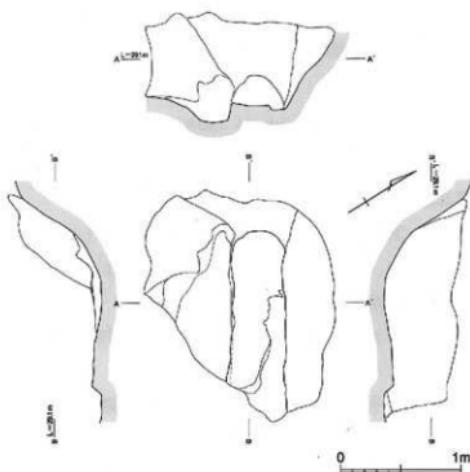
第22図 6号穴加工痕検出状況

4号穴は遺構が剥離落盤しており、現状では著しく破壊されている。詳細は不明であるが、多量の加工痕が残る。石切場の可能性もある。

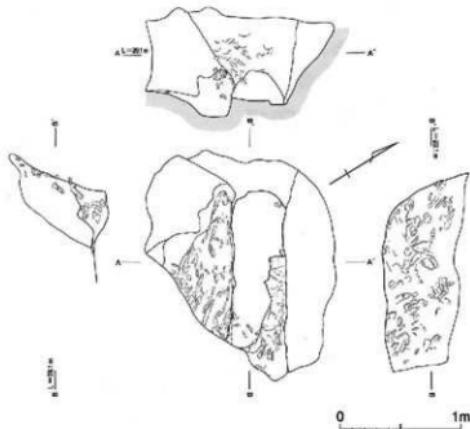
5号穴（第19図）は小型の横穴墓と考えられ、玄室長0.4m以上、玄室幅1.06m以上で、玄室奥壁の一部と床面の一部が残存するのみであるが、須恵器蓋坏の完形品が2点出土している。開口方向はS～31°～Eである。加工は粗く多量の工具痕が残る（第20図）。

第21図1から3は5号穴出土須恵器で、1、2は坏蓋である。1は天井部に回転ヘラ切りを施す。口縁部は内湾しながら外方に伸び、端部を尖り気味に作る。出雲5期の遺物と考えられる。2も天井部に回転ヘラ切りを施す。口縁部は内湾しながら下方に伸び、端部は尖り気味に仕上げる。出雲5期の遺物と考えられる。3は坏身で、底部は回転ヘラ切りを施す。口縁部は外方に内湾気味に伸び、外側に屈曲する。端部は尖り気味に仕上げる。一方、端部内側には小型のかえりが作られる。端部は尖り気味に仕上げる。出雲6期の遺物と考えられる。

6号穴（第22図）も小型の横穴墓と考えられ、玄室長1.00m以上、玄室幅0.92m以上を測る。開口方向はS～28°～Eである。岩盤が剥離崩落しているため、詳細は不明である。遺物は瓦片が1点出土している。



第23図 7号穴実測図



第24図 7号穴加工痕検出状況

7号穴（第23図）は石切場の可能性もある遺構である。平面プランは縦長1.90m以上、横幅1.58m以上の縦長で床面両側に2条の深い工具痕を残す（第24図）。開口方向はS～59°～Eである。遺物は甕片が出土している。

註（1）古泉 弘 「江戸を掘る」柏書房 1983年

（2）大谷晃二 「出雲地域の須恵器の攝年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』 1994年

第4章 小結

第8支群は崩落が激しく後世に石切場も複合している。そのため横穴墓は現況でかなりの破壊が進んでいたが、出土遺物については残存状態がよく、出土品も豊富である。

横穴墓の時期について

第8支群の横穴墓7穴のうち、遺物から時期が推測できるのは、1、2、3、5号穴で、出土遺物から次のことが推察される。

1. 2号穴は出土した須恵器蓋坏や六窓鍔から、出雲4～5期の横穴墓と考えられる。
2. 3号穴は出土した象嵌鍔が八窓鍔と考えられることから、造墓された時期は出雲4期の中で最も2号穴に先行する時期と考えられる。
3. 1号穴は3号穴出土の須恵器甕片と接合関係にある甕片が出土しており、3号穴と同時期に造られたと考えられる。
4. 5号穴は出土した須恵器蓋坏の時期から、出雲5～6期の横穴墓と考えられる。

以上のことから、第8支群の年代が確認できる横穴墓の中で、最も早く造墓されたのは、1、3号穴で、やや遅れて2号穴が造墓された。その後、5号穴が造られたと考えられる。

3号穴出土の象嵌鍔について

3号穴出土の象嵌鍔は象嵌を側面に施す耳象嵌鍔で、倒卵型を呈す板鍔に8個の方形状窓を穿つ。豊島直博氏は自らの論考¹⁾で、象嵌鍔には倒卵形で有窓のものが多く、また高度な技術が必要とされる象嵌技術については、鉄のみを加工する技術があれば製作可能な象嵌を持たない鍔とは生産体制が異なることを指摘している。それゆえ全国的な象嵌鍔の分布も特定地域に集中する傾向にある。これについて豊島氏は、象嵌鍔は畿内で生産し各地に配布された鍔で、中央政権が高度な製作技術を要する装飾付大刀や象嵌鍔付大刀を生産することによって武器の在地生産に対抗し、それらの配布を通じて地方支配を進めていったと考えられている。

出雲周辺では、上塩治築山古墳、妙蓮寺山古墳などから、象嵌大刀が数例出土しており、ある程度の集中性は認められる。第8支群出土の象嵌鍔も畿内との関係を考える必要があろう。

1号穴出土の人骨について

1号穴出土人骨については江戸以降のものと考えられる。このように横穴墓を再利用した例は、上塩治横穴墓群の中でも見ることができる。また後世になって横穴墓に遺体を置く例も、他の遺跡で少數ながら見られる²⁾。しかしながら当遺跡から出土した人骨は、解体された可能性も考えられ、非常に特殊な例と考えられる。今後、資料の増加を待ち、改めて検討することとしたい。

註（1）豊島直博 「古墳時代後期における大刀の生産と流通—近畿地方を中心にして—」『考古学研究 第48巻第2号』 2001年

（2）井上貴央氏の御教示による。

上塙治横穴墓群第8支群出土遺物観察表1

博物館番号	写真図版	出土地点	種別	法 直(cm)	手 法 の 特徴	断 士	焼成	色 調	備 考
6- 2	国版 9	1号穴玄室 褐色土	陶器 壺	口径:(7.0) 器高:不明 底径:不明	外面:施釉 内面:施釉 底部:不明	密	良好	淡青白色	・内面間に貫入がある ・外面に植物を描く
6- 3	*	1号穴玄室 明褐色土	陶器 鉢	口径:不明 器高:不明 底径:不明	外面:施釉 内面:施釉 底部:不明	密	良好	暗赤褐色 内面:暗赤褐色 断面:黄灰色	・口縁部端部を外側に 折り曲げる ・口縁部外側に1本の沈線
6- 4	*	1号穴玄室 表土	陶器 碗	口径:8.1 器高:4.7 底径:3.5	外面:施釉 内面:施釉	緻密	良好	白色	・外面に第1花などを 型紙捺す ・高台焼跡
6- 5	*	1号穴玄室 表土 (表土)	陶器 壺	口径:6.0 器高:2.4	外面:施釉 内面:施釉	密	良好	黄白色	・外面に木に留まつた 鳥が描かれる ・口縁部膨脹
6- 6	*	1号穴玄室 表土 表土	陶付 碗	口径:(11.6) 器高:不明 底径:不明	外面:施釉 内面:施釉	緻密	良好	灰色	・外面に朱付
11- 1	*	2号穴玄室 No.1	須恵器 壺蓋	口径:12.4 器高:3.9	外面:回転ナデ・回転ヘラ・ 回転ヘラ切り 内面:回転ナデ	2mm以下の砂 粒を含む	良好	青灰白色 (一部黄灰色) 内面:青灰色	・天井部にヘア記号(×)
11- 2	*	2号穴玄室 No.2	須恵器 壺蓋	口径:12.7 器高:4.2	外面:回転ナデ・静止ナデ・ 回転ヘラ切り 内面:回転ナデ	2mm以下の砂 粒を含む	良好	青灰色 (一部黒褐色) 内面:黄褐色	
11- 3	*	2号穴玄室 No.4	須恵器 壺蓋	口径:12.1 器高:3.7	外面:回転ナデ・静止ナデ・ 回転ヘラ切り 内面:回転ナデ・静止ナデ	1mm以下の砂 粒を含む	良好	黄褐色 (一部暗青灰色) 内面:青灰色	
11- 4	*	2号穴玄室 No.5	須恵器 壺蓋	口径:12.1 器高:4.4	外面:回転ナデ・静止ナデ・ 回転ヘラ切り 内面:回転ナデ・静止ナデ	1mm未満の砂 粒を少程度含む	良好	青灰色 (一部黄灰色) 内面:黄褐色	
11- 5	*	2号穴玄室 No.6	須恵器 壺身	口径:11.4 器高:3.8	外面:回転ナデ・回転ヘラ 内面:回転ナデ	1~3mmの砂 粒を含む	良好	暗青灰色 内面:淡青灰色	
11- 6	*	2号穴玄室 No.7	須恵器 壺身	口径:10.4 器高:3.9	外面:回転ナデ・回転ヘラ・ 回転ヘラ切り 内面:回転ナデ・静止ナデ	密	良好	青灰色 (底部青灰色) 内面:青灰色	
11- 9	*	2号穴玄室 表土	陶器 壺	口径:6.4 器高:2.6	外面:施釉 内面:施釉	緻密	良好	内外面:白色	・擦みを施す ・空気孔穿孔 ・口縁部露胎
11-10	国版10	2号穴玄室 表土	陶付 壺	口径:小明 器高:不明 底径:8.0	外面:施釉 内面:施釉	密	良好	内外面:白色	・外面に朱付 ・底部露胎
11-11	*	2号穴玄室 表土	陶器 小壺	口径:7.2 器高:4.5 底径:3.3	外面:施釉 内面:施釉	緻密	良好	内外面:乳白色	・外面に草花を描く ・高台焼跡 ・貫入がある
11-12	*	2号穴 上	須恵器 壺	口径:不明 器高:不明 底径:不明	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	1mm以下の砂 粒を含む	良好	暗青灰色 内面:青灰色	・腹部に刺突文 ・脚部に透かし
16- 1	*	3号穴玄室 褐色土 (褐色土の裏)	須恵器 子供壺	口径:不明 器高:不明 底径:不明	外面:静止ナデ・指鋸压痕、 ハケ目 内面:静止ナデ	2mm以下の砂 粒を含む	軟	暗赤褐色	・外面部赤色壓痕 ・粘土の接合部が残る
16- 2	*	3号穴玄室 褐色土	須恵器 壺	口径:不明 器高:不明 底径:8.9	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ・静止ヘラ	1mm以下の砂 粒を含む	良好	暗褐色 内面:黑褐色	・脚部に透かし
16- 3	*	3号穴玄室 褐色土	須恵器 壺	口径:不明 器高:不明 底径:不明	外面:静止ナデ・平行タキ 内面:静止ナデ・青海波文	1mm以下の砂 粒を少程度含む	良好	暗青灰色	・頭部外間に8条以上 の沈線
21- 1	国版11	5号穴玄室 褐色土	須恵器 壺	口径:13.3 器高:4.2	外面:回転ナデ・回転ヘラ切り 内面:回転ナデ	1mm未満の砂 粒をや多く含む	良好	灰褐色 内面:青灰色	
21- 2	*	5号穴玄室 褐色土	須恵器 壺	口径:13.4 器高:4.4	外面:回転ナデ・回転ヘラ切り 内面:回転ナデ	1mm未満の砂 粒を少程度含む	良好	灰褐色 内面:青灰色	
21- 3	*	5号穴玄室 褐色土	須恵器 壺	口径:12.2 器高:5.4	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底部:静止ナデ・回転ヘラ切り	1mm未満の砂 粒を含む	良好	灰褐色 内面:暗青灰色	

上塙治横穴墓群第8支群出土遺物観察表2

辨別番号	写真図版	出 土 地 点	種 別	法 量(cm)	備 考
6- 1	図版 9	1号穴玄室	鍍金 羨道	鍔長: 6.0 火前部径: 1.5 ツバ接合部径: 0.9	吹口から見て左側に接合部 古泉編年記～V段階
11- 7	*	2号穴玄室	全環	鍔長: 2.8 鍔幅: 3.1 肥厚: 0.7	銅製耳輪に金メッキを施す
11- 8	*	2号穴玄室	全環	鍔長: 2.9 鍔幅: 3.2 肥厚: 0.7	銅製耳輪に金メッキを施す
12- 1	図版10	2号穴玄室	鍛製品 大刀	鍔長: 84.7 鍔幅: 3.9 肥厚: 1.6	刃面に剥離
13- 1	*	2号穴玄室内G	鍛製品 刀	残存長: 9.8 残存幅: 7.5 肥厚: 0.6	倒部削板跡? 六窓跡?
17- 1	図版11	3号穴玄室 褐色土 (地山ブロック混入)	鍛製品 刀子	鍔長: 19.0 残存幅: 3.3 肥厚: 1.8	刃面に剥離
17- 2	*	3号穴 褐色土 (地山ブロック混入)	鍛製品 刀子	残存長: 15.4 残存幅: 3.0 肥厚: 0.9	刃面に剥離
17- 3	*	3号穴 褐色土 (地山ブロック混入)	鍛製品 刀子	鍔長: 16.8 鍔幅: 3.3 肥厚: 1.5	刃面に剥離
18- 1	*	3号穴 褐色土 (地山ブロック混入)	鍛製品 大刀	鍔長: 86.7 鍔幅: 4.1 肥厚: 1.7	刃面に剥離
18- 2	*	3号穴 褐色土 (地山ブロック混入)	鍛製品 大刀	鍔長: 66.5 鍔幅: 3.5 肥厚: 1.6	刃面に剥離
18- 3	*	3号穴 褐色土 (地山ブロック混入)	鍛製品 象嵌刀	鍔長: 4.1 鍔幅: 2.7 肥厚: 1.1	板鈔前面に銀象嵌 銀線の幅・深さともに約 0.4 mm 銀線の最大幅(カーブ部分) 0.6 mm 八窓跡? 18-4と同一個体
18- 4	*	3号穴 褐色土 (地山ブロック混入)	鍛製品 象嵌刀	残存長: 3.5 残存幅: 2.9 肥厚: 1.1	板鈔前面に銀象嵌 銀線の幅・深さともに約 0.4 mm 銀線の最大幅(カーブ部分) 0.6 mm 八窓跡? 18-3と同一個体

上塩治横穴墓群第8支群出土人骨について

鳥取大学医学部機能形態統御学講座形態解析学分野

井上貴央、椋田崇生

1.はじめに

このたび、出雲市上塩治から横穴墓群が検出され、そのうちの2基から人骨が検出された。人骨発見の報を受け、2001年7月9日に現地に赴き、人骨の出土状況の確認と取り上げ作業を行った。

1号穴から検出された人骨は、特異な肢位をとって検出されており、横穴墓に伴うものではなく、後世に横穴墓が再利用された可能性が高く、その時代の決定は現時点ではきわめて困難である。したがって、本稿では今回検出された人骨の概略を紹介するにとどめることにしたい。2号穴は骨の保存が悪く、得られた情報はきわめて少ないが、あわせて、本横穴墓の人骨の概略を紹介する。

2. 1号穴

玄室の中央部に1体分と考えられる人骨が、一部交連状態を保った状態で検出された。玄室前方には、狭道の長軸方向と直交するように下肢骨が認められ、玄門から見て左手には寛骨が検出されている。また、仙骨の一部と下位腰椎も交連状態を保って検出されている。寛骨と大腿骨はほぼ交連状態にあると考えてよいが、手前には左大腿骨が位置し、奥方に右大腿骨が位置するため、寛骨と大腿骨の部分を見る限りにおいては、腹臥位での埋葬であると断定できる。しかしながら、左寛骨へ左大腿骨近位部の下から同一人物と考えられる頭蓋骨が検出されており、また、右上肢骨および上肢帶の骨は、右の肩甲骨、上腕骨、橈骨、手根骨、指骨が交連状態にある。しかし、交連状態を示す下肢との位置関係はきわめて不自然であり、何らかの理由で人骨が動かされたか、身体の一部がバラバラになった状態で本横穴墓に持ち込まれた可能性があることは間違いない。

これらの人骨は、骨の太さや形態から判断して、同一人物のものと考えられる。骨の残りが比較的良好にもかかわらず、胸郭を構成する胸椎や肋骨、胸骨が検出されていないのは奇異な感じを受ける。

本横穴墓から検出された人骨リストを表1に示す。頭部から順次検出入骨について概説したい。

頭部は上顎部～鼻部を欠くが、そのほかの部分は完形である。頭蓋は全体として華奢である。今回は詳細な骨計測は省略したが、頭の長幅示数は中頭に属するようで、前頭幅は小さい。前頭部はやや膨隆している。眉弓の発達は悪いが、眉間は中等度に突出している。眼窓間幅および鼻幅は広い。側頭骨の乳様突起は中等度に発達しており、項面のレリーフは比較的強い。顔面頭骨では右頬骨が検出されているのみである。

三主縫合は外板では癒合傾向、内板では閉鎖、乳様突起は中等度に発達している。上顎歯は顔面頭蓋の大部分を欠くために不明である。下顎骨は華奢で、歯牙はすべて脱落している。また、臼歯部の歯槽はすべて閉鎖している。

頸椎～胸椎は1点も検出されていない。腰椎では下位の第3～5腰椎が検出されている。また、仙

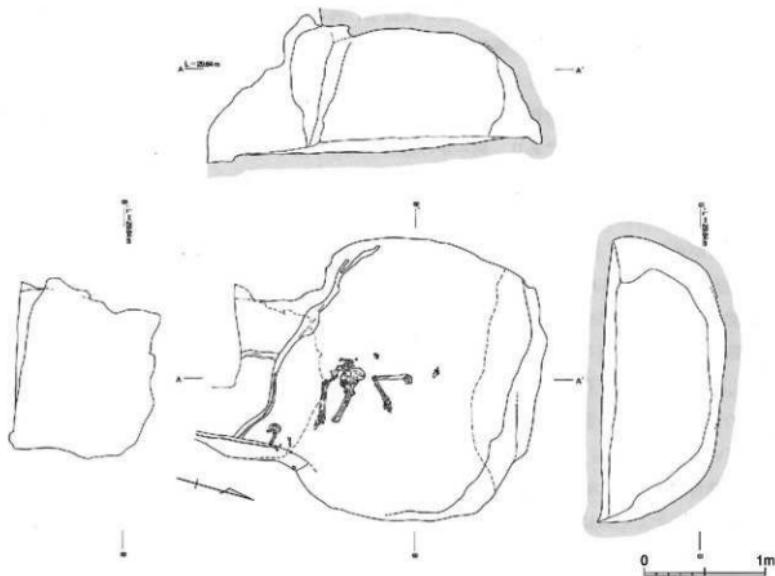
骨では仙骨底の一部が残存している。残存する部位を見る限りにおいて、椎骨の病的所見は認められない。

上肢骨では、右上肢の骨が残存していたが、左上肢の骨は全く検出されていない。上肢帯の骨では、右肩甲骨の関節窩および肩甲棘の一部が検出されている。右上腕骨は、近位骨端～遠位骨幹端にかけて残存している。上腕骨は全体的に小さく、女性骨を連想させるが、小結節、三角筋粗面は比較的よく発達しており、筋力を必要とする生活を営んでいたことがうかがえる。前腕の骨では右橈骨、右尺骨が検出されているが、いずれも遠位端を欠く。これは自然風化によるもので、人為的な欠損ではない。前腕骨遠位端に連続するようにして、手根骨、指骨の一部が検出されている。手根骨は右の月状骨、舟状骨、三角骨が確認されており、指骨では右第2～4中手骨が確認されている。

下肢帯の骨では左右の寛骨が検出されているが、いずれも寛骨臼を中心とした部分である。大坐骨切痕は広く、女性骨をうかがわせる。下肢骨では左右の大腿骨が検出されているが、破損しており、骨最大長は計測し得ない。また、脛骨片も一部が検出されている。右の足根骨では踵骨、距骨、舟状骨、内側・中間楔状骨が、左では踵骨、距骨、舟状骨、内側・外側楔状骨、立方骨が確認されている。また、右では第1中足骨と第1基節骨、左では第2、3、5中足骨が確認されている。

残存骨を見る限り、骨には病的な所見や創痕は認められない。

以上の所見を総合的に考えると、本人骨の性別は女性であることは確実である。年齢は詳細に絞りきれなかったが、熟年～老年としておきたい。



1号穴実測図

次に、本人骨の特異な肢位について若干の考察を加えたい。寛骨～下肢にかけての骨を見ると、腹臥位での埋葬が考えられる。しかし、頭部の上に下肢と交連状態にある骨盤部が載っており、このような状態は普通の交連状態を保った埋葬肢位では考えられない。

本横穴墓の人骨の検出状況や検出入骨を検討すると、本当に古墳時代の人骨であるのかどうかについては、はなはだ疑問である。少なくとも筆者が知りうる限りにおいて、このような特異な検出状況を示した横穴墓はない。玄室入り口～中央部にかけて、人骨が一部交連状態を保ったまま検出されているという事実を考えると、後世に遺体の一部を本横穴墓に投入した可能性が非常に高い。しかも、その際は、遺骸が大きく切断されていたか、あるいは右上肢・骨盤部～下肢が脛帶だけでつながった状態で別々に投入された可能性が指摘できよう。

動物の侵入に伴う人骨のかく乱は、横穴墓でよく認められる現象であるが、ある程度骨が交連状態で残っていたこと、骨盤部～下肢の重量のある部分が頭部に載っていたことを考えると、何らか的人為的な行為を考えざるを得ない。もし、本人骨が人為的な行為によって殺戮・遭棄されたものとすると、事件性があることになるが、骨の年代は古く、刑事事件としての15年の時効ははるかに過ぎていることは確実である。

3. 2号穴

骨は玄室内に散布した状態で検出されており、保存はきわめて悪い。上腕骨片が1点、大腿骨片が4点、脛骨片が1点検出されている。これらの人骨片は、お互いに離れたところから検出されているが、検出位置が本来のものよりも動いている可能性が高い。骨の質感はよく似ており、同一人骨のものであることを強くうかがわせるが、確証はない。

同一の部位が重なって検出されではおらず、検出された人骨はほぼ1体分としても矛盾はない。大腿骨片の厚みは厚く、男性骨をうかがわせるが確言できない。

4. 謝辞

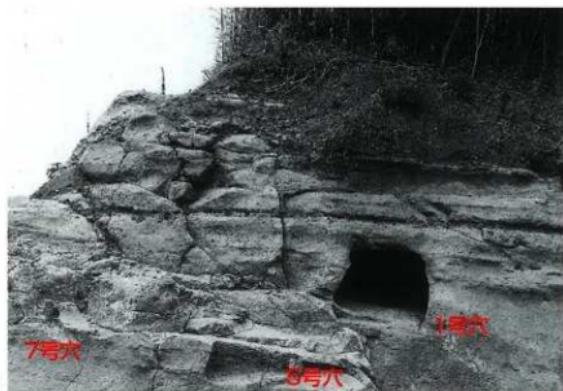
稿を終わるにあたり、本人骨の調査の機会を与えていただいた、出雲市役所文化財室の各位に御礼申し上げる。調査にあたられた出雲市役所文化財室の遠藤正樹副主任主事には、図面の作製等でお世話になった。記して御礼申し上げる。

表1. 上塩冶横穴墓群第8支群の出土人骨リスト

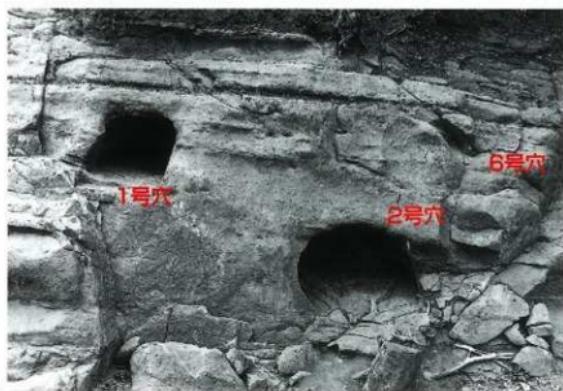
1号穴			
取上げ番号	骨名	部位	備考
1	右 大 骰 骨	P/C	
2	左 大 骰 骨	P-C/D	
3	右 肩 骨		寛骨臼
4	左 肩 骨		寛骨臼
5	仙 管		仙骨底
6	仙 管		
7	第 3 腰 椎		椎弓板のみ
	第 4 腰 椎		椎門板と椎弓根
	第 5 腰 椎		椎体ほぼ完形
8	左 頸 骨		
9	骨 片		
10	右 上 脇 骨	P-C-D欠	
11	右 腋 骨	P-C-D欠	
12	右 尺 骨	P欠-C-D欠	
13	右 肩 中 骨		関節窩部、肩甲棘の一部
14	右 第 2 ~ 4 中手骨		
	右 月 状 骨		
	右 舟 状 骨		
	右 三 角 骨		
15	左 運 骨 片		
	左 運 骨		
16	右 運 骨		
	右 運 骨		
17	右 第 1 中足骨		
	右足第 1 跖節骨		
	右 角 状 骨		
	右 内 側 楔 状 骨		
18	左 第 5 中足骨		
19	右 中 間 楔 状 骨		
	右 外 側 楔 状 骨		
	左 角 状 骨		
	左 内 側 楔 状 骨		
	左 外 側 楔 状 骨		
	左 立 方 骨		
	左 第 2 中足骨		
	左 第 3 中足骨		
20	胫 骨	P	
21	下 腹 骨		
22	頭 盖 骨		
23~29	骨 片		
30	右 胫 骨	P欠-C-D欠	
	左 胫 骨	P欠-C-D欠	
	右 膝 盖 骨		

2号穴			
取上げ番号	骨名	部位	備考
1~3	大 骼 骨 片	C	
4	上 髋 骨 片	C	
5	大 骼 骨 片		
6	胫 骨 片		

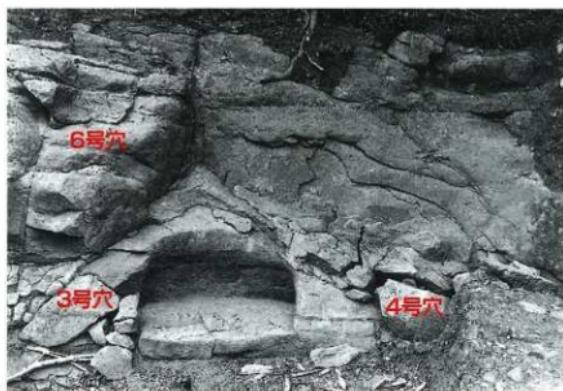
図 版



1·5·7号穴完掘状况



1·2·6号穴完掘状况



3·4·6号穴完掘状况

図版2



1号穴人骨出土状況1



1号穴人骨出土状況2



1号穴人骨出土状況3



2号穴土層堆積状況



2号穴（正面から）



2号穴玄室内検出状況

图版4



2号穴埋葬施設検出状況



2号穴玄室内排水施設検出状況1



2号穴玄室内排水施設検出状況2



2号穴玄室内排水施設検出状況3



3号穴土層堆積状況



3号穴鉄製大刀出土状況

图版6



4号穴完掘状况



5号穴須惠器出土状况1



5号穴須惠器出土状况2



6号穴完掘状况1



6号穴完掘状况2

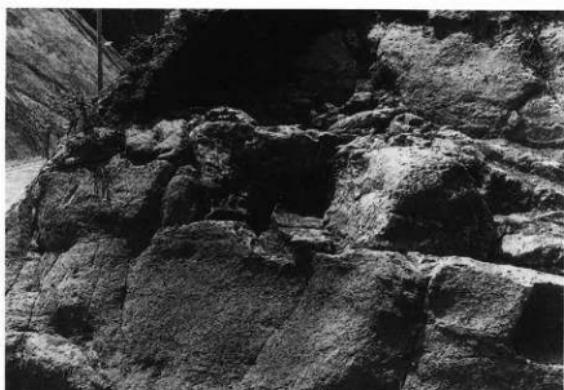


调查区西侧土层堆积状况

図版8



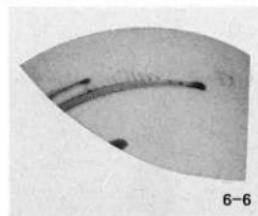
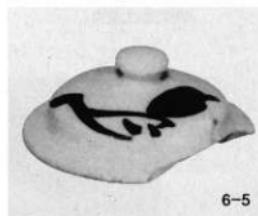
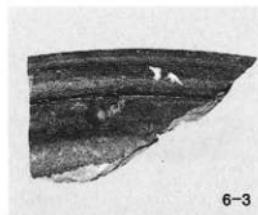
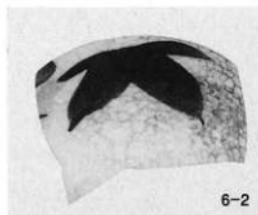
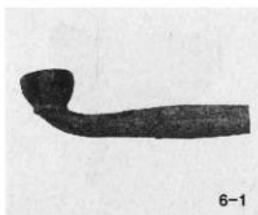
7号穴土層堆積状況



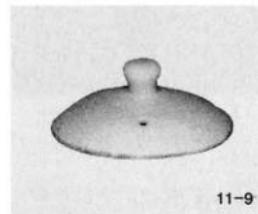
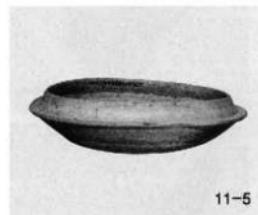
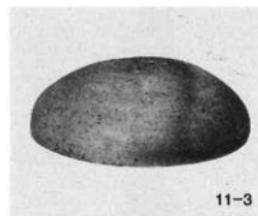
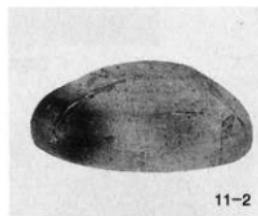
7号穴完掘状況（正面から）



7号穴完掘状況（上から）

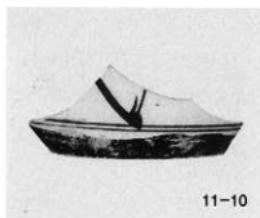


1号穴出土遗物



2号穴出土遗物1

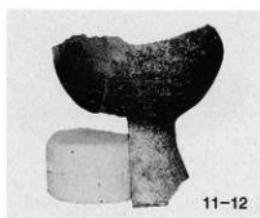
图版10



11-10

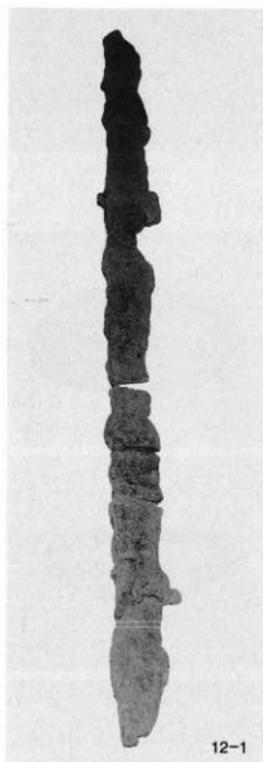


11-11

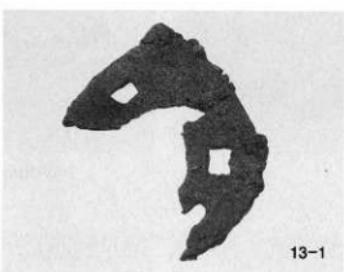


11-12

2号穴出土遗物1

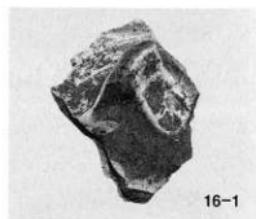


12-1



13-1

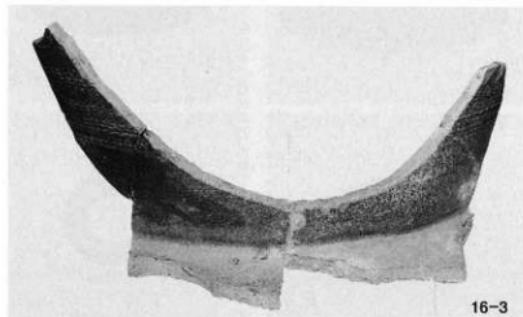
2号穴出土遗物3



16-1

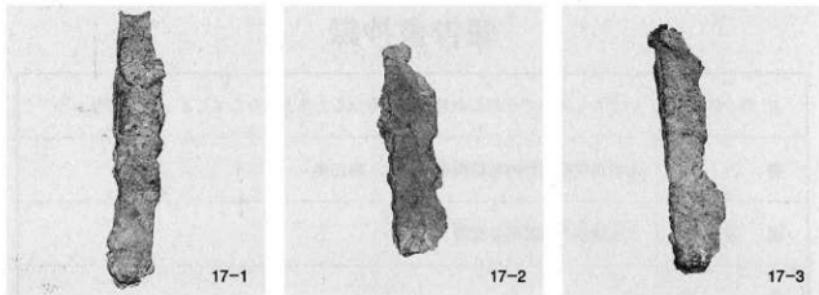


16-2

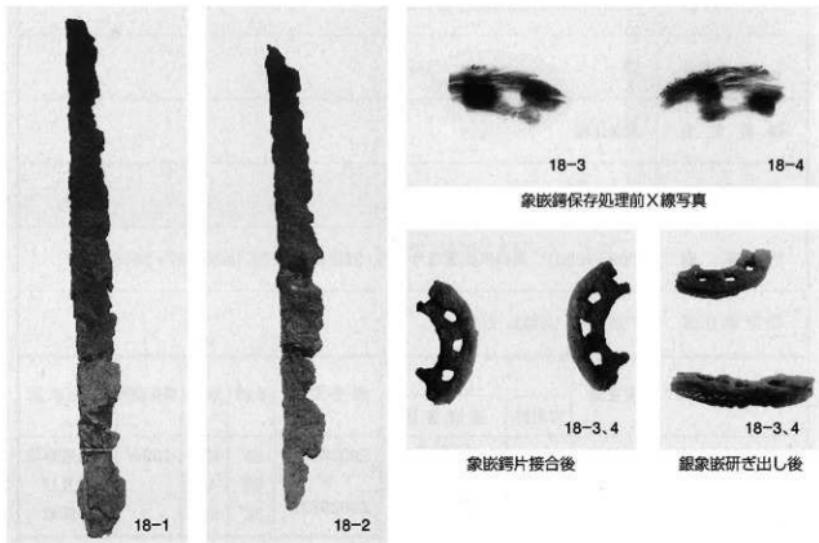


16-3

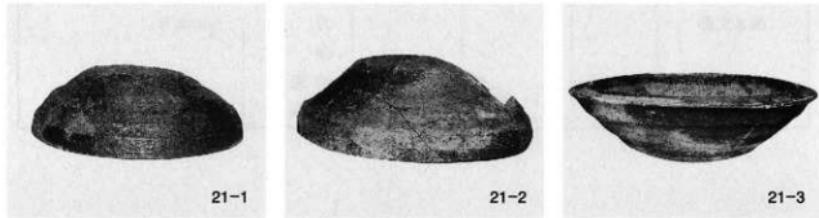
3号穴出土遗物1



3号穴出土遺物2



3号穴出土遺物3



5号穴出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いづもしmaiぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ だい13しゅう							
書名	出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書 第13集							
副書名	上塩治横穴墓群第8支群							
卷次	13							
シリーズ名	出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	13							
編著者名	遠藤正樹							
編集機関	出雲市教育委員会							
所在地	〒693-8531 島根県出雲市今市町109番地1 TEL 0853-23-3636(代)							
発行年月日	平成15年(2003)2月28日							
所取遺跡名	所在地	コード		調査期間	北緯	東経	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上塩治横穴墓群 第8支群	島根県 出雲市 上塩治町	32203 F20-8 出雲市遺跡地図 1993.3	1 20020803	20020531 38"	35° 20' 38"	132° 45' 58"	120m ²	職員駐車場 造成及び 土砂採取
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上塩治横穴墓群 第8支群	横穴墓	古墳後期	横穴墓	鉄製大刀 刀子 金環 須恵器 土師器	銅の中に銀象嵌を施したものあり。			

出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書
第13集

2003年2月

発行 出雲市教育委員会
印刷 ユウワン・ライン